

# 蘇芳集

秋明菊

高橋 さえ子

花 時

青山

丈



草踏んで身のうちかろき無月かな  
月光にそろふ秋明菊の白  
救急車止まる秋明菊の前  
青竹のゆれて寒月崩れざる  
静養の身に冬の田の日が熱し  
発火せむばかり広野の枯芒  
令和二年匆忙と寒明ける

遠くなく近くもなく桜かな  
桜から出る小道あり出たことなし  
ひとり来て土手の桜の根を跨ぐ  
知らぬ人知らぬ顔して昼桜  
花筏まで来てみんな引き返す  
花時の蕎麦屋の暗き座敷かな  
花に疲れて一足の靴を脱ぐ

梅にゐる

吉田幸敏

みどりごの拳をひらく冬の梅  
寒の梅 恩寵の影零しけり  
夢の世の寒紅梅のあたりかな  
雄心の梅 一輪にかかづらふ  
白梅や声に出ださば言葉失す  
たましひの折り目をひろぐ梅 真白  
鳥になる齡はすぎて梅にゐる

春の夜の

小川美知子

三寒四温袖口をまた濡らす  
臘梅の下まで行つて電話切る  
齋館の前は白梅ばかりなり  
逸れてゆく話が楽しフリージア  
返信を待ちくたびれて菫草  
三つ目の角を曲がれば春の月  
食べし皿読みかけし本春の夜の

日脚のぶ

上林孝子

塀沿ひに曲りて風邪の心地かな  
山茶花にため息ほどの日が届く  
仏前の殊更紅し冬りんご  
節分の亡夫を真似て声張れり  
冬晴れて遠きものより見えはじむ  
冬ひとり深夜堰なす思ひごと  
日脚のぶ 畳屋の音二階より

鎌倉は

木内憲子

通勤の車中しづかに春立ちぬ  
水温むことの人ごゑまづ集ひ  
鎌倉は椿の紅き辺りかな  
難きこと色々ありて木瓜の花  
白梅や言葉従ふべくありぬ  
時すぐに淡くなりゆく春の鶯  
道々の日射を肩に春立ちぬ

別れ

小島みつ如

四温日和老い次つぎと欠伸かな  
小鈴鳴らすきさらぎのけふ始まると  
朝日さす白梅いよよ清らかに  
背山みなうすくれなるに雨水かな  
子ら育ち団地ひそやか春夕焼  
駅ホーム春一番に身のすくみ  
早春の別れやいつか遇へさうな

風生忌

清水裕子

シャボンに泡細かく咲かせ雛の日  
身の内に大地の息吹きクロッカス  
心音の届くかぎりに松の芯  
竜ゐるか春の川面の蠢きぬ  
立子忌の視野の果てなる湖の色  
句を学ぶ鞆の重き風生忌  
その中の一足春の泥まみれ

風光る

下平直子

大寒の晴をくるくるくる働けり  
窓開いて二階より声春隣  
水温む渡れさうなる沼の底  
一沼を鳥の旋回風光る  
風光る沼の全容目に溢れ  
雨あとの森に噎せたる春愁  
流れゆく一葉に春の光あり

何となく

真保喜代子

震災の話に涙三月来  
流し雛師と見しことも遙かなる  
すみれ咲く遠の窓よりヴァイオリン  
丹沢も富士も晴れたる入り彼岸  
日の射して仏間華やぐ春障子  
紫木蓮ある日の事を思ひ出す  
何となく春の句へる夜風かな